

巻 頭 言

3年前に私は、同窓会誌4号の巻頭言に

今年（2020年）の初め頃は、隣国の武漢という都市だけの問題だと思っていた“新型コロナウイルス”感染症問題は、しばらく後には日本でも感染者が見つかるに至った。その時も、問題は武漢からの旅行者に関係する人たちに限られると勝手に考えていた。……この頃は、なお大学行事に影響を与える問題とは看做されていなかったであろう。……やがて大学全体の学位授与式は中止となり、さらには入学式も実施されないのみならず……オンライン授業によって今年度の講義が始まった。……長く難しい試みの時期を経ることになるのだろうか。……何時収束するかも分からない。世界の経済活動は急激に落ち込み、殆どすべての人がコロナ禍に苦しみ、日々喘いでいる。

と書いていた。新型コロナ感染症の急速な拡がり、それに伴う社会生活の変化に驚き、戸惑っていた様子がうかがわれる。

今年5月に新型コロナウイルス感染症は5類に移行されて、私たちの日常も徐々に以前の状態に戻りつつあるように見える。このような状況を踏まえ、役員会は総会行事を4年ぶりに開催することを決定した。コロナ以前は総会行事開催は既定のことであり、開催日を決め、それに合わせて準備を始めることになっていた。しかし今回は、開催して果たして大丈夫かとの心配があり、5類へ移行後も状況の推移を見極める必要もあって、様々の点で準備作業が遅れがちとなってしまっている。皆様にご不便やご迷惑をお掛けしていることである。このような事情をお含み下さって、何卒ご寛容の程をお願い申し上げるとともに、ご都合のつく方は是非とも4年ぶりの総会行事に参加下さるようお願い申し上げます。

世界を覆ったコロナ禍は一応おさまったようである。ではあるが、地球温暖化に因るとされる異常気象は、年ごとにその異常さを増している感がする。今年の夏、京都はもちろん北海道の北端まで異常に暑かった。降水も異常だった。町を押し流すような大雨が降る地域の隣では早魃が深刻だと報じられる。

異常気象問題と並んで、ロシアがウクライナに攻め込んで起こった戦争も私達の心にのしかかってくる問題である。戦争の終わりが見通せないだけでなく、核戦争が引き起こされる懸念が時間とともに増しているように思われてしかたがない。

このようなことを考えているとき、1998年に伊藤清先生が京都賞を受賞されたときの受賞講演が思い起こされた。冒頭部分で、先生は次のように語っておられる：“去る6月、今回の受賞決定の報せに伴い、稲盛財団の方から私の現在の関心事を尋ねられました。私は一瞬とまどいましたが、結局「地球と人類の未来」とお答えしました。”

核戦争の危険や地球温暖化などによって、人類の終わりが近づきつつあると感じざるを得ない現在、4半世紀前に「地球と人類の未来」を深刻に心配されていた伊藤先生の京都賞受賞講演を心して読みなおしたいと思っている。

2023年8月
会長 井川 満